



Title	エルデーイとクリザ : 19世紀半ばの2つのハンガリー民謡集
Author(s)	岡本, 真理
Citation	ハンガリー研究. 2023, 2, p. 63-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90931
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

エルデーイとクリザ

—19 世紀半ばの 2 つのハンガリー民謡集—¹

岡本 真理

1. はじめに

エルデーイ(Erdélyi János, 1814-1868)とクリザ(Kriza János, 1811-1875)は、19 世紀なかばのハンガリーで行われた民謡収集を代表する存在である。前者はハンガリー王国全土を対象に民謡を収集し、『民謡と民話集』(Népdalok és Mondák I-III. 1846-48)を編纂した。1846 年から毎年連続で 3 巻を重ねたこの民謡集には、合計で 1392 編の民謡(数十篇の民話とあわせると 1 巻 480 編, 2 巻 557 編, 3 巻 391 編)が収録された。一方クリザはこの 15 年後に、『野ばら』(Vadrózsák, 1863)でトランシルヴァニア・セーケイ地方において収集した 588 編の詩と 13 編の民話および方言語彙集を発表した。

2 人は 1840 年代に入ってもなく同時期に民謡の収集を開始したが、相互の関係はほとんどなかった。エルデーイはハンガリー国民文化の中心地となったペシュトを拠点とし、クリザはハプスブルク君主国東部のトランシルヴァニア地方で生涯を過ごした。両者の民謡収集は、何を目的とするか、何を収集の対象とし、どう表記するのかについても、少なからず違いがみられた。本稿は、この 2 つの民謡集をその目的、内容および記述法の観点から比較分析し、それぞれの特徴を検証することを目的とする。また、両者の共通点についても、時代的特徴を踏まえた考察を行うことで明らかにする。以下、第 2 章では、近代ハンガリーの民謡収集を通史的に概観し、その発展段階において 2 つの民謡集が占める位置を確認する。また、初期の国内外における民謡収集についても紹介する。第 3 章ではエルデーイの『民謡と民話集』、第 4 章ではクリザの『野ばら』の成り立ちについて述べる。第 5 章では、2 つの民謡集をその目

的、内容、表記法に分けて比較分析し、最後に第 6 章でそれぞれの異なる特徴および共通点について総括したい。

2. 近代初期の民謡収集

2.1 民謡収集の歴史における位置づけ

ハンガリーにおける民謡収集の歴史を、ヨーロッパ各地における潮流を考慮に入れつつ、本稿では以下の 4 つの時期に分けて順番にみていく。

まず第 1 期は、18 世紀後半から 19 世紀初頭の、近代ヨーロッパのロマン主義文学の芽生えによって各地で民謡収集が始まる時期である。ロバート・バーンズやウォルター・スコットによるスコットランド民謡の「発見」は、大陸ヨーロッパの文学者たちに大きな刺激を与えた。ドイツ語圏では 18 世紀末にヘルダーが世界の諸民族の言語文化について百科事典的な知識をもたらし、19 世紀に入るとヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリムの兄弟がドイツ民謡の収集と出版を行った。ハンガリーはこれらに比べて後発国であったが、18 世紀末にハンガリー語での文学的創作が始まると、詩人や作家が民謡収集に関心を寄せるようになった²。Magyar Hírmondó など、この頃刊行が始まったハンガリー語新聞や雑誌が、散発的にハンガリー語の民謡の収集を読者に呼びかけた。

第 2 期は、本稿の主題となるエルデーイやクリザが初の大規模な収集活動を行った 19 世紀なかばである。この頃には中欧の諸民族の民謡が次々と世に知られるようになっていく。まず、カラジッチ(Vuk Karadžić)がセルビア民謡集(1823-33)を出版したが、これがグリムの目に留まり、国際的に大いに注目され評価されるところとなった。コラル(Jan Kollár)はスロヴァキア民謡(当時の概念では「スラブ民謡」)を発表している(1834-35)。同じく 1830 年代に、北欧フィンランドでは民族叙事詩『カレワラ』がリョンロット(Elias Lönnrot)によって収集・発表された(1835 年)。1850 年代以降にはトランシルヴァニアのザクセン人の民謡(1863 年)、ルーマニア民謡(1877 年)も次々に現れた(ティエス 2013 : 81-84, 94-100, Faragó 1971: 65-66)。

第 3 期は 19 世紀後半の、より体系的・網羅的なハンガリー民謡の出版

事業が行われた時代である。『ハンガリー民謡集』 (A Magyar Népköltési Gyűjtemény) 』全 14 巻 (Gyulai Pál, Arany László, Benedek Elek, Orbán Balázs 編、1872-1924)が出版された。19 世紀末にはハンガリー民俗学協会(1889 年設立)や 民俗学雑誌 Ethnographia (1890 年創刊)が活動を開始させた。民俗学博物館も徐々に整備されるなど、多面的で学術的な民俗学の確立に向けて大きく進歩を遂げた時期である。

第 4 期は 20 世紀以降、ヴィカール(Vikár Béla) によってフォノグラフ (録音機) による民謡の採集と採譜の手法が開発され、バルトーク (Bartók Béla)やコダーイ (Kodály Zoltán)がこれを取り入れ、ハンガリーおよび中欧諸民族の民謡を採集し記録した時代である。オルトゥタイ (Ortutay Gyula) 編の『新ハンガリー民謡集 (Új Magyar Népköltési Gyűjtemény)』全 18 巻 (1940-75)、また『ハンガリー民俗学事典(Magyar Néprajzi Lexikon)』全 5 巻 (1977-82)が編纂された。

以上みてきたハンガリーの民謡収集の歴史において、エルデーイとクリザの民謡集は第 2 期に位置づけられるが、これは第 1 期におけるロマン主義とナショナリズムの萌芽によって民衆の口承文学へ関心が向けられるようになったものの、いまだ第 3 期のように体系立った民謡資料の収集の必要性に気づくことはなく、その中間に位置する時代であるといえる。それゆえに、後に詳しく見るように、両者の民謡集にはさまざまな点において時代独特の限界や問題点が見られるのである。

2.2 1840 年代以前の民謡収集

本稿の主題である 2 つの民謡集が世に出る以前には、ハンガリーの民謡に対してどのように関心が払われていたのだろうか。以下では、ハンガリーの民謡収集の歴史を国外と国内に分けて簡単に紹介する。民謡収集への関心は西欧の文化的潮流を受けて始まったものであり、特にドイツ語圏のグリム兄弟の影響は絶大であった。初期のハンガリー民謡の収集と出版は、ウィーンでドイツ語によるものであった。1822 年にウィーンの図書館司書であったガール(Gaál György)が 17 の民謡をドイツ語に翻訳し、Mährchen der Magyaren として発表した。1825 年にはハプスブル

ク高官であり、歴史学者や小説家としても活動したマイラート(Mailáth János)が『マジャールの伝説とおとぎ話(Magyarische Sagen und Märchen)』を著した(本書は後にカジンツィ・フェレンツによってハンガリー語に翻訳された)。また、1829 年には政治家で教育改革を担当した学者でもある Mednyánszky Alajos の妻で先述の Majláth János の実妹である Majláth Ágnes が『ハンガリーの先史時代の物語と伝説(Erzählungen Sagen und Legenden aus Ungarns Vorzeit)』を著し、これも 1832 年にハンガリー語に翻訳されている。ドイツ語圏だけでなく、1830 年には英語でもバウリング(John Bowring)によって Poetry of the Magyars(64 編が収録)がロンドンで出版された(Erdélyi 1846: Előszó)。

一方、ハンガリー国内に目を移すと、地方で早くから歌集が作られていた形跡がみられる。ヴァーツの『歌集(Énekes Gyűjtemény)』がハンガリー国内で初めて印刷された民謡集とされる³。1826 年にはシャーロシュパタクのルター派コレギウムで歌謡集 Érzékeny és víg dalok (1826 年, 1834 年)が編纂されたが、これには当時の流行歌から学生たちのために選んだ 70 曲が収められていた。前者は誰によってどのような読者に向けたものかは不明で、また後者は学校の中で学生たちが利用する目的で編まれたものと思われる。やがて 1820 年代頃には民謡収集への関心が広がり、雑誌 Hasznos Multságok(1818-28)の編集者で熱心な民族主義者であったクルチャール(Kultsár István)が紙面で読者に民謡の魅力を伝え、収集に協力するよう呼びかけた。1828 年には文学者トルディ(Toldy Ferenc)が Handbuch der Ungarischen Poesie でドイツ語のハンガリー民謡(15 曲)を出版した(Faragó 1971: 72-73)。

以上のように、ハンガリー民謡の収集への関心は、最初はドイツ語圏で、やがて国内で高まった。小規模で私的な歌本から始まったものが、やがて本格的で広範囲を対象とする民謡収集の取り組みへと発展していくのである。

3. エルデーイの民謡集『民謡と民話集 (Népdalok és mondák)』 I-III 巻 (1846-48)

エルデーイは 1814 年ハンガリー王国東北部 Ung 県の村 Kiskapos で貧しい農家の末っ子として生まれた。病気がちの父を早く亡くし、経済的に困窮しながらもルター派の名門校シャーロシュパタクのギムナジウムに進学した。卒業後はペシュトの文学界を目指すも現実には難しく、地方の貴族の家庭の家庭教師に雇い入れられるなどして生計を立てた(T. Erdélyi 2015: 25-39)。

1840 年代になってようやく活動を文化の中心地ペシュトに移し、1842 年にはキシュファルディ文学協会の会員に選ばれた。その後、同協会の事務局長に任命されると、彼は民謡集の編纂についての構想を打ち出した。そもそも 1825 年の学者協会（のちのハンガリー科学アカデミー）設立以来、民謡収集はハンガリー語振興のために国が掲げる最重要課題の一つとされ、1832 年には呼びかけが開始していた。全国から続々と民謡の情報が寄せられていたのが、編集の作業が遅々として進まずにいたのである。結局、エルデーイが旗振り役となってキシュファルディ協会がこの事業を受け継ぎ、それまでアカデミー文書館に保管していたデータも移行させることとなった(Csörsz 2014: 613-4)。同時期エルデーイはハンガリー語演劇の聖地であった国立劇場の副支配人にも任命され、また当時都市部ブルジョア層の読者をもっとも獲得していた流行紙 *Regélő Pesti Divatlap* の編集者としても多忙な日々を送り、また詩人として自身の詩集も出版するなど多方面にわたる活躍をした。

しかし、それと前後して彼は家庭生活で思わぬ悲劇に襲われた。妻を第 1 子出産時に亡くし、まだ幼い娘も後を追うようにわずか 2 歳で急死した。妻の死によるショックから、エルデーイはペシュトにおける活動のすべてを休止して旅に出たが、この時、ハンガリー中部の大平原から東部トランシルヴァニアを旅し、民謡に実際に触れ、トランシルヴァニアでは一度クリザと出会っている。2 人がどのような交流を持ったについて詳しいことは不明だが、民謡集の出版の構想について互いに展望を語り合ったのではないかと思われる(T. Erdélyi 2015: 94-95)。一人娘の死後は、傷心を抱え 1 年以上にわたる西欧周遊に出かけたが、その時にイギリスやドイツなどで民謡への関心の高まりに触れたことで大いに刺激

を受け、帰国した翌年からわずか3年間で民謡集全3巻を完成させることになった。

1848年革命から自由戦争にかけての非常事態下では、エルデーイは国民劇場の実質的な支配人として奔走する。ハンガリーの敗戦後は一時的な逃亡生活の後(T. Erdélyi 2015: 255-76)、シャーロシュパタクのルター派ギムナジウムの教授に招聘され、後半生を教育と学校運営に捧げながら、精力的に民謡収集や文学批評、哲学研究を行った(T. Erdélyi 2015: 537-541)。エルデーイはハンガリー語文化が花開きはじめた19世紀中葉のペシュトを拠点として、民謡収集から文学団体や国民劇場の実務、また文芸誌編集まで多方面で精力的な活動を行った。詩人ヴェレシュマルティ(Vörösmarty Mihály)のように文壇の表に立つことはなかったが、勤勉で有能な実務者として近代国民文学の形成を牽引する存在であったといえる。

4. クリザの民謡集『野ばら(Vadrózsák)』(1863)

クリザは1811年、トランシルヴァニア東部に位置するセーケイ地方 Kovaszna 県の小さな村 Nagyajta に生まれた。父親は村のユニテリアン派教会の牧師を生涯務め、クリザ自身もトランシルヴァニア地方の Torockó や Kolozsvár のユニテリアン派学校に学び、早くから読書や詩作に傾倒した(Antal: 8-20)。1835年には牧師として2年間ベルリンに学んだ。帰郷した後は、日々の牧師業のかたわらセーケイ地方の民謡の収集に着手し、これをライフワークとした。

クリザの民謡収集については、残念ながらエルデーイのそれに比べるといまだ不明な部分が多い。クリザは生涯牧師としての仕事を生業としながら、セーケイ地方を自分の足で隅々まで訪れて民謡を記録したという。また彼の活動に協力した者は30名ほどはいたといわれる。トランシルヴァニア地方の中心地 Kolozsvár に住むセーケイ人の男女から聞き取りを行ったり、クリザや彼の教え子たちは休暇でセーケイ地方に帰省すると民謡収集に勤しみ、また彼らは卒業後トランシルヴァニア各地で教師や牧師となり、活動に協力を続けたようである(Faragó: 100-8)。

『野ばら』の構想は 1842 年に発表され、1844 年には予約購読者の募集を開始している。しかし、エルデーイとほぼ同時期に民謡集を企画したにもかかわらず、1860 年代になるまで日の目を見ることがなかった理由は何であろうか。予約購読の知らせが小さなチラシであり、文化の中心地ペシュトと対照的な辺境の土地で思うように認知されなかったこと、また 1848 年革命と自由戦争という政治社会状況の下、出版の計画は難航し、大きく後れを取るようになったと考えられている⁴。結局、1853 年にペシュトの文学雑誌にクリザの名が民謡収集家として紹介されたことにより、初めて全国的な認知を得ることができた。この頃文学界をけん引する存在となったジュライ(Gyulai Pál)が後押しし、トランシルヴァニアの貴族ミコー(Mikó Imre)の資金援助によって、エルデーイの民謡集から遅れること 15 年、ようやく 1863 年に Kolozsvár で出版が実現した(Faragó: 93-94)。

クリザはトランシルヴァニア地方の牧師として生涯を過ごし、生まれ育った土地からほとんど離れることなく、仲間とともにその土地の言語遺産を収集する活動に没頭した。そのため、彼の存命中にはハンガリー中にその活動の成果が広く知られることがなかった。19 世紀後半にハンガリー文学が民衆国民文学(nép-nemzeti irodalom)に重きを置くよう方向づけられていく中、クリザの仕事がいわば文学界に“発掘”されたのである。1870 年代には、キシュファルディ文学協会が編纂する『ハンガリー民謡集』A Magyar Népköltési Gyűjtemény (1872-1924) 全 14 巻 (Gyulai Pál, Arany László, Benedek Elek, Orbán Balázs 編)の中で、11-12 巻にクリザの『野ばら』が収載された。

5. エルデーイとクリザ —その違いと共通点—

前章では、同時期に着手されたエルデーイとクリザ各々の民謡集について、各々の成り立ちを簡単に振り返った。では、2 つの内容について比較してみると、どのような違いがあり、その違いの背景には何があるのだろうか。ここでは主に①目的、②内容、そして③表記の方法の 3 つに分けて検討していく。

5.1 目的

エルデーイは民謡集の序文の中で、民謡を収集することの目的を次のように述べている。第1に「消失していくハンガリー民謡を救済すること」、そして第2に「民謡のもつ力、民衆の精神文化を1つ1つ見出し、あらゆる可能性を持ったハンガリー語の新しい美を探し出すこと」とし、最後に「学問的観点からも民衆への関心を高め、文学に民衆要素を取り入れ、民衆文学を確立すること」であるとしている（2巻序文）。民謡そのものを保存することの意義について明言した上で、民衆のことばで成り立つ民謡を国民的文化遺産ととらえ、民謡を通して人々の教養を高めることに重要性を置いている。そして、民衆のことばによってハンガリー文学を豊かに発展させることこそが、彼にとっての最終的な目的であることがわかる。第4章で述べたように、19世紀に入ってハンガリー語の近代化が始まると、文学の創作はその要となり、民謡の中に伝承される民衆言語の豊かさが文学を発展させると考えられた。エルデーイの目的意識は、まさにその国家的事業の方向性を表しているといえる。

一方クリザは、セーケイ地方に伝承するあらゆる種類の言語文化を書きとめ保存することを目的に掲げている。1844年の『野ばら』の予約購読募集の文章の中で、クリザは「愛する祖国のことばと聖なる任務とともに進めようとするすべての人に呼びかける。自身または他人の口に宿り続ける民謡を、踊りで興奮する若者のかけ声から地方の庶民の習慣や知恵にいたるまで、書きとめて送ってもらいたい。」と呼びかけている（1844年「民謡収集への呼びかけ」より、Faragó: 70）。クリザの呼びかけには、エルデーイのように収集した記録がハンガリー語の発展に貢献するものであるという意識は見られない。彼にとって重要なのは、今この時に民衆の話すことばの諸相をありのままに記録することであった。

5.2 内容

次に、両者の民謡集の内容・構成をみてみよう。エルデーイは収集の対象をほぼ民謡（歌）に限定している。民謡は内容によって細かく分類

されており、愛の歌、結婚式の歌、酒の歌、義賊・プスタの歌、皮肉の歌、真面目な歌、聖なる歌、歴史・民族の歌、兵士・戦いの歌、ロマンス、遊び歌・子どもの歌、チャーンゴの歌、セーケイの歌⁵など豊富なバリエーションがみられる。全国から寄せられたさまざまな民謡は、それが民衆から直接採集した歌であるのか、作曲者が存在する流行歌か、または古い歌集から引用したものかが不明で、区別することができない。エルデーイはさらに、全国から寄せられた民謡の中から似たものや同じ民謡の変種と思われるものを混ぜ合わせ、自身で編集した。複数の地方から寄せられた似た歌を混ぜ合わせることもあった。これについて、エルデーイ自身、第1巻序文の中で「いくつかの歌は3つまたは4つの歌を合わせている。そのように送られてきた異なる歌を混ぜることは問題ではない。ホメロスもオシアンもカレワラもさまざまな歌われ方をし、編集されてきたものであり、ハンガリーの民謡もそれと同じである」と述べている（第1巻序文より）。このような編者による自由自在な手法について、Csörsz は「民謡(népdal)というより、むしろ国の中央から辺境に至るまでをカバーした大衆詩歌(közköltészet)の一大コレクションと呼ぶべき」と評している(Csörsz 2014: 628)。

クリザの『野ばら』は対象地域をセーケイ地方に限定し、まず Udvarhelyszék, Hargita, Háromszék, Mezőség などの地方ごとに分け、そこに伝わる民謡だけでなく、古いバラード、素朴な作り話や妖精物語、子どもの遊び歌など、あらゆる種類の口承文化を収めた。また後半には踊りのかけ声、なぞなぞ、ことわざ、民話、語彙集の章を設けている。中でも興味深いのは、人名（姓・名）とあだ名、犬や猫、馬や牛などの家畜の名前の膨大なリストが収められていることである。また巻末の方言辞典(tájszótár)も多く語彙を収め、各地方の独特の言い回しを A～Z のアルファベット順に並べて解説している。このように、『野ばら』はセーケイ地方のあらゆる形態の言語文化を収集し、その全体像を可能な限り忠実に記録しようという試みであった。

5.3 表記のしかた

5.3.1 採集者と採集地の情報

近代的な民俗学における民俗資料の収集では、基本的に調査者が対象となる社会に直接入り「参与観察」を行うこと、そして採集者の情報（個人の特定、採集場所と時間）と情報提供者の情報（年齢・性別・職業等の属性など）を明らかにすることは必須条件とされる。しかし、このような近代的科学としての民謡収集が始まるのは、ハンガリーでは 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてであり、本稿で扱う 19 世紀なかばの民謡収集では、そのような手法は見られない。2 つの民謡集には共通して、各々の民謡を採集した場所や人物についてほとんど記されていない。

ただし、エルデーイは情報提供者について各巻の序文でその名前を列挙しており、合計して 176 名が彼の民謡集に協力したことがわかる。その範囲はハンガリー全土に及び、西は Vas 県や Zala 県から東はトランシルヴァニア地方の Szabolcs-Szatmár 県や Máramaros-sziget、そしてセーケイ地方に至るまで、北は上部ハンガリーの Nyitra 県から南は Szeged まで、さまざまな地域から寄せられている。提供者の職業は教員や牧師、司祭から織物職人まで多様で、中には職業が不明だけでなく、氏名も記さない協力者もあった。各々が 10～50 編前後、多いものでは 100 編を超える民謡の情報を寄せている。そのバリエーションは豊富である一方、彼らが実際に農村に分け入って聞き取ったのか、それとも「また聞き」の情報であるのか、あるいは情報提供者自身による創作であるのかなどについて、判断することができない。このような状況から、ほぼすべての歌に何らかの人の手が加わっていると考えられること、また当時地域や社会階層を越えて広く人気を博した「民衆もの(népszínmű)」と呼ばれる芝居で歌われる歌謡の影響を受けているという指摘もされている(Csörsz: 615-616)。

一方、クリザの『野ばら』には約 30 名の協力者がいたとされる。その中にはクリザの 4 歳年下で学校時代から長年の収集活動を終始ともにした Péterfi Sándor をはじめ、Székely Ádám, Ürmösi Sándor などの名前が上がっている。生涯にわたってセーケイ地方で牧師として活動したクリザには、多くの地元の収集協力者がいたようであるが、その各々の人物の

詳細については不明な点が多い。クリザと彼らの文通などの記録はほぼ現存せず、数少ない資料も分散し、後に見るように民謡集では各々の歌謡について具体的情報の記載が欠けているため、収集活動の全体像を掴むことがほとんど不可能なのである⁶(Faragó:100-105)。

5.3.2 正書法

ハンガリー語の最初の正書法が制定されたのは 1832 年であり (Magyar helyesírás szabályai)、これより後に出版されたエルデーイの民謡集では、地方の差なくすべての歌が標準的な正書法によって記されている。しかし、全国から編集部に送られてきた民謡は、未ださまざまな地方的特色をもって書かれていたと考えられるし、それを書いた個人による綴り方の差もまだ大きい時代である。エルデーイは前述のように民謡そのものを大胆に編集すると同時に、あえて地域差を消して統一した新しい正書法でこれらを提示したと考えられる。こうすることで民謡は一地方の口頭伝承の枠を超え、その豊かな語彙や詩的表現が普遍的な影響力を持ってハンガリー語文学に取り入れられ、国民文学の発展に寄与することができるという、编者としての積極的な意図が窺える。

一方クリザは、『野ばら』の序文で記述法について次のように述べている。「何はともあれ私が気を配ったのは、耳にしたことのないことばは絶対に記載しないこと、そして記載したものには可能な限り過不足ない解釈を添え、その地域の発音に基づいて表記することだ。」(『野ばら』序文より)

『野ばら』には、セーケイ地方を特徴づける重要な要素であるバラードを中心として、さまざまな形態の民謡と各地方の方言語彙集が収められているが、その表記法は語形態から音表記まで標準語とは大きく異なり、セーケイ方言の特徴を可能な限り反映させようとしたものである⁷。

SZERELMI DALOK.

1.

Arany- ezüstért, czifra ruháért,
Leányt el ne végy koszorujáért;
Inkább szeressed jámborságáért,
Előtted való szép járásáért.

Ne nézz a leány tánczos lábára,
Ne hajolj az ő mézes szavára;
Figyelemmel légy indulatára,
Tanulj szert tenni szíve titkára.

2.

Szomorú már nekem járásom, kelésem,
Talán e világban nem leszen örömem,
Mert az én édesem eltávozik tőlem,
Kiért elbágyadott szomorodott szívem.

1*

エルデーイ『民話と民謡集』第1巻
愛の歌より。近代的正書法による。

4

Műnyön Gyula Márton heggyekön völgyekön,
Ecczör vátozást lát a völgyben keskenyön.

Inasom inasom, kedvesebb inasom!
A föld az istené, a ló az emberké.
Fordájunk, mett vörös szén már a keskenyő,
Kádár Katának is-imman rég vége lett.

A falu végénél vót a disznópásztor:
Hallod-e jó pásztor! mi ujság nállatok? ---

Nállunk jó ujság van, de neköd rossz vagyon,
Mett Kádár Katának immár vége vagyon,
A te édös anyád őt elvitette,
Feneketlen tóba belé is vetette. ---

Jó pásztor, mutasd még, hol vagyon az a tó,
Aranyim mind tőjéd, a lovam s a hintó.

El is mőnének ők a tónak széjire:
Kádár Kata lelköm, szój egyet, itt vagy-e?

A tóba megszólalt Kádár Kata neki,
Hézzája béugrék hamar Gyula Márton.

Édös annya vízi bűvárokat küdött,
Mégkapták méghalva, észszeülőközve;

Egyiköt temették ótár eleibe,
Másiköt temették ótár háta mögi.

A kettőből kinőtt két kápóna-virág,
Az ótár tetejin észszekapcsolóttak,
Az annyok oda mőnt, le is szakasztotta,
A kápóna-virág bézza így szólala:

Átkozott légy, átkozott légy
Édös anyám Gyulainé!
Eltőmbe rossz vótál,
Most is méggyilkóttál.

クリザ『野ばら』バラード Kádár Kata
より。セーケイ地方の音韻を表記。

6. まとめ

本稿で取り上げた2つのハンガリー民謡集は、19世紀末から20世紀にかけて民俗学の近代的方法論が確立するよりも以前の19世紀半ばに編まれたが、それは文化的ナショナリズムの潮流の中で民衆世界のハンガリー語を再発見しようとする時代であった。エルデーイはハンガリー全土を対象に民謡を収集し、創立して間もないアカデミーや文学協会などが展開する国民文化運動における中心的役割を担った。その民謡集は、ハンガリー語新聞や雑誌などのメディアを通して呼びかけることで各地から多くの収集協力者を得て、短期間で膨大な数のコレクションを実現した。これに対し、クリザは生涯をトランシルヴァニアという辺境で過ごし、その収集活動は広く認知されず、また革命や政治状況にも阻まれた末、構想から約20年の時を経てようやく出版にこぎ着けた。

エルデーイは民謡収集の最終的な目的を国民文学の発展に据え、民謡はハンガリー語の近代化に豊かな栄養を与える源泉ととらえた。収集した民謡の種類は豊富である一方、情報源の性質にはほとんど注意が払われなかった。多くの場合、複数の歌を混ぜ合わせたり、流行の大衆的歌謡と混同し、さらに方言要素を取り除き、近代的正書法に基づいて記した。エルデーイにとってそれはごく自然なことであり、民謡集の編纂は近代ハンガリー文学の方向性となる「民衆国民文学(nép-nemzeti irodalom)」の確立に寄与する一大事業であった。

クリザは対象をセーケイ地方に限定し、その言語文化の諸相を記録することを第一の目的にした。地域ごとに細かく分類し、方言の特徴を可能な限り忠実に記録した。エルデーイに比べるとより写実性を保った記録という性質はあるものの、いつ、だれが、どこで語った、あるいは記録したかが一切不明のままである点はクリザにおいても同様であった。しかし、セーケイ地方の言語文化の全体像をありのまま記録にとどめようとするクリザの手法は、近代的な民俗学が確立する以前の 19 世紀なかばにおいて、先取的で挑戦的な試みであったといえる。

このように、現代的な民俗学的視点から見ればさまざまな弱点を持った2つの民謡集であるが、その価値は近代のハンガリー国民文学確立という目的意識や民衆文化の発見という時代的文脈の中で評価されるべきであることは間違いない。これらの民謡集が現在もハンガリー民俗学の歴史の中で際立った存在として記憶されるのは、そのような歴史的意義が十分に理解されるゆえであろう。

注

1. 本稿は、2022 年 6 月 25 日に開催された日本ウラル学会第 48 回研究大会における口頭発表に、大幅に加筆したものである。また、科学研究費補助金・基盤研究 (C)「国家変容と国民文学運動に関する事例研究：近代ハンガリーの文学団体とカノン形成」(課題番号 19K00498、研究代表者：岡本真理、平成 31 年～令和 5 年)を用いた研究成果の一部である。

2. 早くは 18 世紀の詩人 Faludi Ferenc, Dugonics András, Gvádány József に始まり、19 世紀に入ると Fazekas Mihály, Csokonai Vitéz Mihály などが作品に民謡的要素を取り入れた。
3. 1799 年に 76 編を収めた第 1 冊、1803 年に 95 編を収めた第 2 冊、1823 年に印刷された第 3 冊は部分的にしか残っていないために民謡の数は不明である。これらは、1912 年にシャーロシュパタクの図書館で発見された。Pest Megyei Hirlap, 1962 年 10 月 2 日。
(library.hungaricana.hu/hu/view/PestMegyeiHirlap_1962_10/?pg=9&layout=s&query=v%C3%A1lc&fbclid=IwAR3IFz3-m0MGIGhJBWDTnpIvwuoa7tb5Mf6JxfK2_Eg73RTLMt9GVbnSVgk)
4. 1849 年以降、ハンガリー国内の政治的抑圧が強まったバッハ時代には、民謡出版においても革命や民衆蜂起を想起させる内容の歌は厳しく検閲された。クリザも当局に目をつけられないよう政治的な歌を避けねばならず、例えばコシュート(Kossuth Lajos)の名は持ち出すこともできなかったという(Faragó 1971: 86-88)。一方、1848 年革命直前に全巻を出し終えたエルデーイの民謡集には「兵隊と軍隊の歌」とするカテゴリーがあり、25 編が収録されている。その中には、次のような明らかにハプスブルク皇帝を批判する歌もある。「母さんのバラの木、僕がその枝の一つさ。皇帝フランツに折り取られ、武器の下敷きとなって枯れたのさ」Édes anyám rózsafája, én vagyok az egyik ága, Ferencz császár leszakasztott, fegyver alatt elhervasztott (I 巻第 355 歌)。これはバッハ時代には到底許可されない内容であろう。
5. Székely Ádám は、エルデーイの民謡集第 1 巻が発表された際、そこにセーケイ地方の民謡が入っていないことを指摘する手紙をエルデーイに送り、その中で「セーケイ地方には多くの貴重な歌が存在しており、それを『野ばら』としてまとめる予定である」旨を伝えている。第 2 巻には、Szentkirály Károly という人物からセーケイ地方の歌 67 編が送られてきたことが記されている。
6. クリザの遺稿の行方を調査した Szakál によると、大抵の場合は子孫によって保管されていた遺稿や書簡が、後世に研究機関等に渡り、精査・研究されるものであるが、クリザの場合、トランシルヴァニア地方の特質として、近現代の領土変更や 2 つの世界大戦における人の移動が特に著しく、記録が失われやすか

ったという (Szakál 2017: 8-9)。

7. クリザの収集にも、いわゆる「民衆風(népieskedő)」の要素が混ざってはいるものの、クリザはそれを慎重に地域別の項目から外して”Vegyes (混合)”として収録している(Szabó T. 1971: 189)。

参考文献

- Antal Árpád, Faragó József, Szabó T. Attila (1971) *Kriza János (három tanulmány)*. Dacia könyvkiadó, Kolozsvár.
- Arany László, Gyulai Pál (szerk.)(1882) *Székellyöldi gyűjtés. Magyar Népköltési Gyűjtemény* 3. gyűjtötték Kriza János et. al. Athenaeum, Budapest.
<http://mek.oszk.hu/11500/11577/index.phtml#>
- Csörsz Rumen István (2014), A Népdalok és mondák közköltészeti forrásai.
Irodalomtudományi Közlemények. 118, 611-624.
- Erdélyi János (1846), *Népdalok és mondák*. I. köt. A Kisfaludy-társaság.
(1847), *Népdalok és mondák*. II. köt. A Kisfaludy-társaság.
(1848), *Népdalok és mondák*. III. köt. A Kisfaludy-társaság.
- Erdélyi János válogatott művei. (szerk. Lukács Sándor)
<https://mek.oszk.hu/04900/04939/04939.htm#69>
- Gaál György (1822, 1857), Märchen der Magyaren. In *Ungarische Folksmarchen*.
<http://mek.oszk.hu/08800/08824/08824.pdf>
- Kriza János (1863), *Vadrózsák. Székely népköltési gyűjtemény. I. kötet*. Kolozsvár.
<http://mek.oszk.hu/13800/13864/13864.pdf>
- Kriza János, Orbán Balázs, Benedek Elek és Sebesi Jób (1882), *Székellyöldi Gyűjtés*. Athenaeum R. Társaság.
- Ortutay Gyula (főszerk.)(1977-82), *Magyar néprajzi lexikon*. I-V. köt. Akadémiai kiadó.
- Ortutay Gyula (1981), *A nép művészete*. Gondolat, Budapest.
- Ortutay Gyula (1985), *Magyar népköltészet*. Akadémiai kiadó, Budapest.
- Pintér Jenő (főszerk.) (1933), *A magyar irodalomtörténet*. Akadémiai kiadó.
- Szakál Anna (2017), Források Kriza János gyűjtőhálózatának kutatásához. *Nyelv- és*

Irodalomtudományi Közlemények. 61-1. 7-28.

T. Erdélyi Ilona (1974), A Magyar Népköltési Gyűjtemény kiadásának története. *Magyar könyvszemle*, 55-78.

T. Erdélyi Ilona (2015), *Erdélyi János (1814-1868)*. Kalligram, Pozsony.

ティエス、アンヌ＝マリ(2013)、斎藤かぐみ訳『国民アイデンティティの創造
十八～十九世紀のヨーロッパ』勁草書房。